

---

# 白銀の髪と紅の瞳

谷川 山木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白銀の髪と紅の瞳

### 【Nコード】

N7838X

### 【作者名】

谷川 山木

### 【あらすじ】

クリスマススイヴの夜に強盗によって殺された俺、谷本 優志。もう二度と開く筈のない目が見たものは、オンラインゲームとそっくりの異世界だった！  
しかも体はアルビノにかかった小さな女の子！  
名前をカノンと変え、異世界での第二の人生が幕を開けた……。

(あとがきは活動報告に書いておりますので、よろしければどうぞ)  
(誤字脱字の対応は、指摘・発見の後可能な限り早く修正いたします)

す。見つけれられた方は、どうかご協力お願いします。

## ハジマリ

12月24日。聖夜と呼ばれるクリスマスイヴ。

その日は雪が深々と降っていた。聖なる夜に綺麗な雪は見事にマッチしていても神秘的な風景だった。

街に繰り出せばカップルが仲睦まじく2人で歩いている様子をよく見かける。

自分も女と一日ゆっくりと過ごしたいもんだが、俺こと「谷本優志」に女性との縁は薄く、今日のように寂しい日を過す事になる。仕方なく実家に帰り、酒を買いに行くことに。

その傍らには来年には高校受験が控えている妹が一人。気分転換の為、一緒に行く事に。

2人で近場のコンビニに向かって歩いて行く途中、色んな話を話した。

最近、勉強は捗っているか？

仕事は辛くないか？

友達と上手くやっているか？

ちゃんと食事は取っているか？

そんな話を話しながら歩いて行くと、10分でコンビニに到着。ウィーンとスタイリッシュな機械音と共に自動ドアが開く。そこには奇妙な光景が映っていた。

驚愕と恐怖に支配された表情のコンビニの店員。

黒いニットに3つの穴を穿ち、それを限界いっぱいまで深々と頭に被った男性。

男性の腕は店員に一直線に伸びており、その手にはおもちゃ屋で

見た事のある様な丸い弾装がむき出しの黒い拳銃。

一言でこの場を表わすと、

「コンビニ強盗!？」

俺にはその場面にしか見えなかった。

強盗の男はこちらを見るなりいっぱいに目を開かせ、「くそっ!」  
と悪態を吐きながら店員に向けていた銃をこちらに向けた。

轟音。

拳銃から放たれた弾丸は、轟音が耳に届く前にすでにこの体の肉を捉え、血の色に染まった穴を穿つ。

その瞬間は、体感速度でまさに刹那。

人が感知できない速度で放たれたそれは、俺に何も感じさせなかった。いや、「感じる」という行動が遅すぎる。

膝から崩れ落ちるように地面に倒れる俺。そこでようやく撃たれたという実感と共に湧いてくる、形容できないほどの激痛。

「いやあああああああ!!!」

横にいる妹の絶叫。しかしそれもとくなく遠く聞こえてくる。

震える右手で右脇腹に手を当てる。又チャと手が感触の悪い音を立てて体に激痛が走る。

寝たままの状態で手を膝から挙げると、そこには掌全体を染め上げた鮮血の赤が俺の視界を埋め尽くした。

激痛の熱さだけを残して底から冷えて来る体。  
次第に体からは力が抜け、耳も目も次第に閉じていく感覚が襲う。  
腕が地面に落ちると、意識はじきに暗闇の底に落ちて行った。

\*\*\*

ここは何もない世界。見渡すことの出来る景色というモノは存在せず、上も下も前後左右も不覚な世界。その世界はただただ暗闇だった。

「おや、ここにお客さんとは珍しい」

ふと、後ろから低くて通る声がした。  
視線を後ろに動かすと、そこには一筋のスポットライトの様な光が射しこんでおり、その光の中には小洒落たバーのカウンターにあるようなイスが置いてある。

光の外側から見知らぬ男がやってきた。

男は長身痩躯で黒いスーツをまるで自身の一部のように着こなしている。顔は切れ長の目とスツとした顔の線で、オールバックの艶のある黒髪と耳のシルバーピアスがよく似合う。

全体的な印象として、彼はキリツとした年齢不詳な男だった。

その人物は片手に赤いカクテルを摘まんでいて、光の円環のただ中にあるイスにゆっくりと座った。

「ここは転落者の世界だ。自身の世界に見捨てられて、世界から吐き出された者が訪れる世界。君はどうかやら世界というものに見捨てられ、運命の女神に見染められたようだね」

世界？ 運命？

「ああそうさ。君は世界に見放され、最早自分が誰だか覚えてはいないだろう？ 君みたいにこの世界に来る者は、自身がどんな形だったのかすら覚えていない。勿論、僕にもそれは知る由は無いよ。僕の存在理由は、この世界にやってきた「転落者」の運命の歯車を回してやる事だからね」

？ どういう事だ？ 一体お前は何が言いたい。

目の前の男は手に持ったカクテルを口にクイツと流し込み、喉を鳴らしてこう答えた。

「分からないかい？ 私の言っている事は。なら君はまだ自分の真実にたどり着いていない証拠さ。生き物は意味もなく生まれてはこない。なぜなら意味のない存在は虚無と同じだからね。自分とは別の存在に認められるという事は、「在る」と言う事が必要だからさ」

男は饒舌に語りを続ける。俺にはそれが、まるで何かを説いている様にも見えた。

「おっと、些か喋りが過ぎたようだね。まあ君にはまだ私の存在も言っている事も分からないだろう。しかしそれはいつか必ず巡り合

う。次の存在になっても覚えておくといい。「転落者」と言う、真実に辿りつかぬが故に真実を真に必要とする存在を」

そう言っつて男はカクテルを飲み干し、中身のなくなったグラスを背後にポイツと放り投げた。

グラスは暗闇へと姿を消し、男はそれを一瞥もくれずに手を差し出す。

? この手はなんだ?

問うた俺に対して、男はフツと微笑みを浮かべてこう告げた。

「君という存在に、あわよくば幸と真実が訪れる事を」

そう言っつて、中指と親指の腹を合わせた手は、

パチンッ

と軽快な音を鳴らした。

それを合図に、この世界は再び暗闇に包まれる事となる。



## 第1話

朝。陽が昇り始め、屋敷近くの林が太陽をバツクにしてサワサワと風に揺られている。

屋敷は陽光によって白い体をより一層白く輝かせている。

その中で屋敷の使用人達は、既に仕事に勤しんでいる。

その中の一人のメイドがとある部屋に入っていく。彼女はこの屋敷のメイドとしてはそこそこ長い経験を持つ。名前はヴィヴィアンと言う。

彼女の仕事はこの屋敷の婦人が子を産んで以来、その子供の世話となっている。

ヴィヴィアンは開けた扉を閉める。

部屋は寝室だ。壁に洋服入れの大きなタンスがあり、部屋の真ん中には天蓋付きのベッドが堂々と鎮座している。

その上で眠るのは、ベッドの大きさに対してあまりに小さな少女。白金色の髪を伸ばし、胸を上下させてスヤスヤと実に気持ちよさそうに眠っている。

その人形のような少女を見ているとヴィヴィアンは眠気に襲われるが、眠ってしまう訳には勿論いかない。

ヴィヴィアンはベッドの横に立ち、ベッドの上に寝ている少女を起こす事にした。

「お嬢様。日輪の鐘が鳴りました。そろそろ起床のお時間です」

少女の体をユサユサと揺する。

少女は眉間に皺をよせ、ヴィヴィアンとは反対側に寝返りを打って自分の眠りを妨げる物に対しての対抗策に打って出る。

しかしそんな眠気の中で切られた策を意に介さず、ヴィヴィアンの起床を促す揺さぶりは続く。

その揺さぶりが功を奏したのか、少女はようやくその淡紅色の目を開けた。

「お早う御座います。カノンお嬢様」

少女はその声を聞くと、ゴシゴシと眼を擦りながら緩慢な動きで体を起こした。

\*\*\*

朝。いつもこの時間帯は心地よいかすかな揺れと俺の名前を呼ぶ声によって始まる。

体を起して周りを見る。眠気眼で見えづらいが、ベッドの横にいる人物ぐらいは視認できる。

横にいる人物はメイド服を着た女性で、褐色の肌に綺麗な黄色いトパーズのような眼は、元が細いのか切れ長だ。

その特徴は長身な彼女をより一層女性たらしめている。腰まで伸

ばしたサラサラの黒髪もうまく容姿にマッチしている。

彼女は俺の世話をしてくれる専属メイドのヴィヴィアン。身の回りの世話をしてくれる有能なメイドさんだ。

彼女に起こされる俺は、所謂低血圧で朝に弱い。低血圧の人は早めに会う移民を取る事で朝起きれるようになるらしいが、睡眠が足りていないのか朝は中々起きられない。

今日はまだマシな方だ。

酷い時は昼頃まで寝て過ごす時もある。唯一救いなのが、低血圧の症状で朝に起きる頭痛がそれほど酷い症状にならない事だろう。

「おはよう、ヴィヴィアン。いつもありがとう」

「いえ、これが私の仕事ですから。さ、お嬢様。お着替えを致しますので鏡の前のイスに」

そう言いながらヴィヴィアンはスツと手を差し出す。俺はその手を取って緩慢な動きでベッドから体を起こした。

この薄い紫色の天蓋付きベッドは俺にとって少々大き過ぎる。

一々ヴィヴィアンに手を貸してもらわないとベッドから出にくいのは俺にとって如何ともしがたいのだが、この家の者たちは基本的に、

「それも仕事のうち」

で片付けてしまう。俺としてはベッドくらい自分で出たい。

そんな事を口に出さず心の中でつらつらと文句を垂れていると、人が丸々映るような長方形の鏡と、その前にあるイスに座らされた。

目の前の鏡に、自分の姿が映し出される。

髪の毛は横にいるヴィヴィアンより細く、窓から差し込む朝日に照らされる髪の毛の色は白金色だ。髪の毛が少しボサツとしているのは今が寝起きだからだと理由をつけて無理やり自己完結。

顔は少し丸みがある童顔で、眼は元々が少し大きいのに加えて二重瞼によってさらに大きく見える。眼の色は透きとおった淡紅色で、乳白色な肌のせいにより一層際立っている。

寝間着であるカボチャパンツのような下着である薄いピンク色のドロワーズと、肌より白い純白のシースルー。

そして体はヴィヴィアンの半分ぐらいの身長。まるで大人と子供だ。

いや、まさに大人と子供である。そこに揶揄や比喻なんて存在しない。

この状態がまさに俺の現状。昔の俺の姿である日常に疲れたスーツ姿の成人男性の面影なんて欠片もない。

「御髪を梳かせていただきます、カノンお嬢様」

ヴィヴィアンに髪をゆつくりと梳かれている間、俺は毎日の習慣になりそうな朝のため息をつくのであった。

## 第2話

ヴィヴィアンによって寝間着からドレスに着替えさせられ、家族との朝食に向かう。

ドレスは薄い桃色のアフタヌンドレスで、露出と装飾は少なめ。下の丈は足首まであり、袖は手首近くまである。アフタヌンドレスは外に出ない俺にとって基本的に部屋着と化している。

母親曰く、ドレスはその場その時間帯で見合った物を着こなす事、と言われた。

故に俺の着替えの時間は朝に着るドレスの着替え、夜に着るドレスの着替え、寝る時の服の着替えと3回ある。着替えさせてもらえるのだが、正直メンドクサイ。

ドレスについて最初は歩きにくい、膝下がスースーする、着替えるのがメンドクサイで真剣に抗議しようかと考えた事もあったが、習慣とは怖いもので既に慣れ始めている。スカートの裾を踏んでこけた事は無理やりいい思い出として受け止める事にした。

ヴィヴィアンを後ろに引き連れ、家族の待つ食卓へ。この食事の時間が俺にとって少し憂鬱な時間となる。

家族が待ち、朝食の場であるダイニングルームの扉をヴィヴィアンが開ける。

そこには長い長方形のテーブルと、家人の数と同じ数の背が長いイス。一番奥には藍色の燕尾服に身を包んだ男性が座っており、その横にメイドが二人待機している。

男性の名は、アイザック・アルテシア・イヴ・フィッツジェラルドと言う。

この家の、アルテシア家の現当主で、あまり多くを語らない厳格な人でもある。

「おまたせしました、おはようございます。おとうさま、おかあさま、おにいさま」

まだ少し舌つ足らずな言葉で挨拶をする。

それに父はただ一言、「ん」と頷きだけを返してきた。

それを見て、俺は目の前にある縦長なイスをヴィヴィアンに引かせ、ドレスのスカート部分を押さえながら腰かける。

「まあ、よく出来ました。カノンちゃんは賢いのねえ」

掌を軽く合わせ、にこやか顔で話す金のロングヘアーが似合う女性。母親のアイリーンだ。

「ありがとうございます。おかあさま」

「お父様、カノンもやって来た事ですしそろそろ朝食を頂きましょ  
う」

俺から見て右の席に座っている少年、兄のシャルルが父にそう告げる。

それを聞き届けた父は一つ頷くと、軽く握った右拳をゆっくりと胸に置いた。

「豊穰の女神と大地の精霊よ、お恵みに感謝いたします」

父がそう言い終わると、皆目の前の料理を食べ始める。

先ほど父が述べた口上は、「いただきます」と同じような食事の前口上だ。

この村、アルテシアは「豊穰の女神」が眠っている地と近く、この地域はこの言葉が食事時の前口上となる。

他の村や地域ではその地域独特の口上があり、それに習ってその場の代表者が口上を述べるのが一般的な習わしである。

今日の朝食はパンとコーンスープに似通ったスープだ。味はコーンスープに似てはいないが、これはこれで俺の好物でもある。

既に一切れ一切れ分けられているパンをスープに浸す。この世界のパンは固いので、パンをスープに浸して食べる。これはこれで食べ慣れるとおいしいものだ。

普段はナイフとフォークで食事を行うが、パンを題材とした料理は基本的に手掴みである。

パンをスープに半分ほど浸し、口に入れる。

いつもと同じくおいしい料理を堪能しながら、周りを見る。

他の家族もこの料理を黙々と食べ続けている。この世界では食事時に会話をすると所謂「行儀の悪い」行いとなってしまう為、皆何も言わずに料理を口に運んでいるのだ。

この状況が、俺の「食事の時間が少し憂鬱な時間になる」理由である。

やはり何か物哀しい。食事は一家の団欒と俺は考えている。

その俺からするとこうやって黙々と食べ続けている状況には、元々少ない食欲もさらに右肩下がりがだ。

一家の中で一番歳が低い事もあって、一番早く食べ終わるのはいつも俺。

今日も先に食事を終え、席を立つ。食事の後は「ごちそうさま」などと言わず、そのまま自室へと変えるのが通例である。

ヴィヴィアンを連れてこの部屋を出る。

俺はその間、家族を一瞥もくれなかった。



### 第3話

ヴィヴィアンを連れてダイニングルームを出た俺は、ヴィヴィアンを他の仕事に戻し、自分の寝室の横にある自室に入る。

自室はこの子供の体でなくても広く、壁紙は白で清潔感がある。頭上にある豪華なシャンデリアの様な光源は昼でも爛々と光を放っている。

中の家具は、俺の成長度に合わせて買い替えられる高級感溢れる机とイスや少し小さなオルガンの様な楽器。レイピアの様な細い剣をバツテン印で壁に掛けて、その真ん中に盾を置いた物もある。

窓は昼でもカーテンで閉め切られている。その理由は俺のこの体のせいだ。

俺の体は日光に弱い。と言うより紫外線に弱い。はっきり病状を伝えられた訳ではないが、恐らく「先天性白皮症」、所謂アルビノと言われる病気になっていると思われる。

視力が弱く日光が非常に眩しく感じるようになって、紫外線のせいで非常に癌になりやすい。この眼が赤いのも、肌と髪の毛が白いのも、このアルビノの症状である。

これは俺の前世の知識。この世界ではそんな事が分かる程医療について発展はしていない。

前世と言ったのは、俺はこの世界での記憶とは別に前世での記憶を持っているからだ。

前世では専門学校を卒業して中小会社に就職し、いたって普通に生活をしている新人サラリーマンの日本人だった。

そんな俺はコンビニ強盗に行くわして殺され、気づいた時は既にこの世界で「カノン」と言う子供に生まれ変わっていた。

赤ん坊の記憶はうる覚えで、物心ついた時は既に歩く事が出来るぐらいには成長していて、その時に自分が女だった事に気付き、思わず股間に手が行ってしまったのは仕方ない事だと思いたい。

年についてはおおよそ5歳ぐらいだと思う。この世界は1日が30回、おおよそ夜の月が満月から新月を挟んでもう一度満月に満ち欠けするのが日本で言う1か月と考えられている。

そしてこの世界は1年が10月まで。日本より2か月少なく1年が終わる。

親が言うに、俺が生まれたのが6年程前だと言う。実際には、風の精霊が5巡戻った頃に生まれた、と言われた。この世界で1年は、風の精霊が世界を巡る期間と同じになっている。

この世界の知識は、学ぶ事もあれど知っている知識も間々ある。何故ならこの世界に心当たりがあるからだ。

俺は前世で一つのネットゲームにハマっていた。そのゲームの名前は「Non Exit Online」。  
通称「NEO」。

謳い文句の「脱出不可能な面白さ」の言葉が印象的なオンラインゲームだった。

そのゲームの世界観と、この世界はよく似ている。

国の名前。物の名前。クリスタルの存在。歴史。外見。まだ未確認だが、魔術や精霊なども同じかもしれない。

そんな世界の中で、俺の心は期待感と恐怖感の半々な状態だった。

魔術や剣を題材としたネットゲームの中だったら、そういった夢物語のような体験も可能ではないか。そういった期待感と。

日本にいた時とは文化レベルどこるか根本的に違うところもある。日本みたいにある程度保証された生活は出来ないかもしれない、といった不安感。

それともう一つ。今はもう諦めたが、あわよくば元の世界に帰りたい。そうも思っている。

この世界に家族はいるが、元の世界にも家族は存在する。友人も親戚も恩人も、みんなあつちの世界の住人だ。

その人達ともう一度会いたいと思うのは、やはり心の奥底でこの世界に不安で寂しがっている証拠だろう。

取り敢えず、この世界で死なないように幸せに生きて、元の世界に帰れそうなら帰る方法を探す。暫くはこの方針でこの世界を生きていく事にした。

その為に必要なのは、この世界での知識と常識。身を守る方法。気の合う友人と、それと頼れる助言者だ。アドバイザー

後、毎日欠かさず日本語で日記をつける事。

当然の話だが、この世界で話されている言葉は勿論日本語じゃな

い。

赤ん坊の間に言葉を覚えてしまったせいか、話している言葉はこの世界の言葉だ。

日本語を忘れないよう日記の裏に五十音を書いて、毎日日記をつけて覚えておかないと、帰れた時に困る。もし帰れなくなっても、何かに有効活用できるかもしれない。

そう考えると、俺のこの思考は日本語で行われているか、この世界の言葉で行われているのか。それも分からないな。それも確認できるなら一応確認しておこう。

これからの指針を決め、「よしっ！」と日本語で喝を入れると、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「お嬢様、お父様がお呼びになられております」

あの人か。少し苦手なんだよなあ。嫌いじゃないんだけど。

厳粛な父を思い出して、少しドアから尻込みする俺であった。

## 第4話

「おとうさま、カノンです」

「入りなさい」

ヴィヴィアンが目の前の扉を開ける。

ガチャツと押し扉が開き、部屋の内容を俺の視界に訴えてくる。

白を基調としたシックな感じの部屋で、目の前には向かい合った2つのソファと1つのサイドテーブル。さらに奥には仕事を行う為の上質な木で出来たデスクテーブルがあり、そのデスクテーブルのイスに父は腰かけている。両サイドの壁にはズラリと本が本棚に収まっている。

ここは父の仕事場兼書斎だ。父は人を呼びつける時は決まってここにいる。

ヴィヴィアンが一礼して扉を閉める。基本的にここでは使用人の付き添いは許されていない。

俺の場合は体が弱い為、特別に許してもらっているのだが、流石に部屋にまで連れ込む事は許されないだろう。それをヴィヴィアンも承知の上で、自分から出て行ったのだ。

ヴィヴィアンが出ていくと、父のアイザックはイスから立ち上がり、すぐ後ろの大きな窓に体を向ける。俺に後ろ姿を見せながら、父は言った。

「体調はどうだ。カノン」

数日に一回、こうして呼び出されてはいつも聞かれるこの質問。やはり親として心配をしてくれているのだろう。俺は父の後ろ姿に微笑みかけて答えた。

「はい。カノンはげんきです」

父は「そうか」と一言。少し安堵の様な感情が見え隠れしたような気がするが、気にしない。

「そのまま元気に過ごしていなさい。近々、イルミナの領主の子息が訪ねてくる」

イルミナの子息？ 誰だそれ。

イルミナというのは分かる。この町からは南に下る一本道があり、途中分かれ道を挟んで突き進んだ所にあるこの周辺で一番近い街「イルミナ」だ。

イルミナはそこまで大きな街じゃないが、活気のある姿はまさにこの国の特色を色濃く醸し出している。

その街の子息って事は、そこを収める領主の息子って事か。

おお、何気にこの町以外の人と初対面か。少し楽しみだ。

「はい、わかりました。おとうさま」

「うむ。伝える事はこれで終いだ。下がりなさい。無理はせぬようにな」

「はい」と返事をして、目を閉じ頭をほんの少し下げた扉の前で軽く体を爪先で浮き沈みさせる。軽い挨拶やなにかの時はこういった仕草を取る事が多い。

あまり喋りを得意としない父親だけど、やはり俺には優しい父に思える。

まあ怖いって事も否定はしないけど。

父の優しさで見知らぬ人との対面に少し心を躍らせながら、俺は部屋を出た。

\*\*\*

「はあ」

窓ガラスを背にしてため息を一つ。

何かおかしいところは無かっただろうか。もっと何か言う事があったのではないだろうか。

自分しかない部屋の中で自問しても、答えなんて帰って来る筈もない。

その時、目の前の扉がゆっくりと開く。

体に自然と力が入る。しかして今日はカノンしか呼び出していないのに、誰が入ってくるというのか。

扉の向こうから現れたのは、少し白みがかった腰まで伸びる金髪を揺らして顔を覗かせる私の妻である「アイリーン」だった。

アイリーンは部屋に入って私の横までやってくる。そして肩に手を置いて一言、こう言った。

「お疲れさま」

私は彼女の手には自分の片手を反対側から重ねる。

私の事をよく知っている人物には、私の考えている事はすぐに分かってしまうらしい。

「まだ、あの子達との距離が分からない？」

私は黙して首肯した。

私にはまだ、今のこの現状が夢の様に思えてならない。

出来た妻を持ち、二児の父となって、急に自分が場違いな場所に來てしまったかのようなようだ。

子供達とはどう接すればいいか分からない。純真無垢な子供達は、私の事をどう思っているのか。不安で不安で仕方がない。

本当は、あの子達に色んな事をしてやりたいと思っている。

しかしどうすれば子供達と自然に触れ合えるか、それがまだ分からない。

子を成して育てるといふ事が、これほど怖くて、これほど大変ななんて一昔の私は知る由もなかった。



だが、

「幸せでしょうか？ 家族というものは」

彼女を見る。妻はどこまでも深く続くような微笑みを浮かべている。

彼女の言う事に、私は一つ、重く首を縦に振った。

「幸せさ。でなければ嘘だ。君みたいな妻がいて、子供が2人もいて、周りの環境に文句もないし、村の人たちはいいい人ばかりだ。夢心地、と言うのだろっな。この様な気持ちは」

「そうね。でも、最近小さな歯車が狂いだしたわ。今はまだ大きな歯車に影響を与えてないけど、それも時間の問題。何かあったら最新の注意を払って。この小さな歯車が影響を与える対象は、恐らく子供達に繋がっている」

彼女は先ほどの微笑みを消して、久しく見なかった類の真剣な表情を浮かべている。

「不可避な未来図、と言う訳ではないのだな」

「あらいやだ、その不可避な未来を根性で捻じ曲げた人がいるんだもの。そんな言葉はもう役に立たないわ。そうでしょうか？ 私の王子様」

「やれやれ、一体何年前の話を持ち出してくるのかねアイリーン」

ふふふっと口に手を当てて笑い、妻は真剣な表情を解いた。

「まだ少し余裕があるわ。私はその間に、あの子に何かを教えてあげられるかしら」

「出来るさ。私は昔からこう言っているだろう」

一つ息を飲み込んで、今までの人生で口癖のように言ってきた言葉をついた。

「出来る事から目を逸らすな、と」

そう、だから私も、子供達から目を逸らす訳にはいかないのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7838x/>

---

白銀の髪と紅の瞳

2011年10月30日06時23分発行